普　及　情　報

一丸となってイチジク産地の活性化に取り組む

加古川市の北西部に位置する志方町では、1970年代からイチジクが転作作物として導入され、部会を組織して栽培が推進されてきた。

現在の兵庫南農協志方いちじく部会は、部会員数29名、栽培面積3.6haとなっており、姫路市中央卸売市場へ出荷している。

1　部会の特徴

志方いちじくは、はじめに“部会ありき”である。部会活動は活発で、総会・研修会・講習会・出荷についての、打合せ会・目慣らし会・調整会議・反省会など全員参加で意思統一を図り切磋琢磨している。

特に、検査は極めて厳しく、市場での評価も上がり単価の維持につながっている。

志方いちじく部会の最大の特徴は、自分たち自身に厳しくできる点である。

2　品質向上への部会の取り組み

(1)　発生予察

1999年出荷打合せ会へ部会員が持ち寄ったイチジクに、防除を行っているのにもかかわらず、アザミウマ類（スリップス）の被害果が多く見られた。

そこで、2000年より、部会員全員が黄色粘着板を用いた発生予察に取り組み、結果に基づいた一斉防除を徹底することで、アザミウマ類の被害を著しく軽減させている。

(2)　結果枝間隔の改善

現在、果実生産の主力として働いている樹は、樹齢が20年を越えるものが多く、栽植距離は1.8m×5m程度、結果枝間隔は40cm以下となっている。密植となっているこれらの園では、着色しにくく、園内が乾燥しにくいため、降雨後に病気に感染する果実が見受けられた。

そこで、部会では着色の向上と病害果の減少を目的に、既存園については結果枝間隔の拡大を、新植園については栽植距離を2m×6m以上の間隔へ拡大するよう取り組んでいる。

(3)　施肥体系の見直し

部会では、施肥基準として施用する成分量の目安を示している。また、これまで以上に高品質の維持を図ってほしいという市場の要望に応える形で肥料の種類についても統一し、2002年からは肥効調節型肥料を施用して、安定した生育による果実品質の向上を目指す施肥体系を導入する予定である。

3　今後の課題

病害虫については適期防除の徹底を図り、農薬の使用回数を減らしていくこと、結果枝間隔を拡大することがあり、密植園では間伐と既存樹主枝の再延長の組合せや施肥体系の改善による大玉果安定生産等、課題は多い。産地を維持するためには、新規栽培者の確保も必要となるが、これからも部会員が一丸となって取り組めるよう支援していきたい。

安部　健志（加古川普及センター）

部会員による精度の高い発生予察を実践

ひょうごの農業技術　No. 119

平成14年1月1日（隔月刊）

1部250円（申込先・県立中央農業技術センター）

兵庫県立中央農業技術センター（0790）47－2400
兵庫県立北部農業技術センター（0796）74－1230
兵庫県立淡路農業技術センター（0799）42－4880

R70　13 Ⓟ 1-001 A 4